

Facilitating Kanji Acquisition and Retention by Using Web-based Practice

Hitomi Endo, Duke University hendo@duke.edu
Naoko Kurokawa, Duke University kurokawa@duke.edu

1 はじめに

漢字は初級レベルから導入されているが、教室で時間をかけて指導や練習をするのは現実には難しく、学習者の自習に任せていることが多いのではないかと思われる。デューク大学の場合も時間的制約により、漢字は使用している教科書の課に出てくる順に従って、教室で形（書き順／画数／部首）、読み（音読み／訓読み／送り仮名）、意味を簡単に紹介して空書やカードによる練習を行い、教室外では学習者が宿題や漢字シートなどで自習し、教師は漢字クイズをすることで習得の確認、定着を図るような方法をとっている。しかし、定着はなかなか容易ではないのが現状である。

では実際に学習者がどのように漢字を勉強しているのか、学習者の自習の仕方について日本語を履修している学生を対象にアンケート調査を行ったので、その結果をまず報告したい。

2 調査の概要

対象はデューク大学の2004年春学期の日本語履修者61名で、内訳は一年生26名、二年生18名、三年生11名、四年生6名である。そのうち日本語を勉強する前に漢字を知っていたという漢字圏学習者は18名で全体の30%、漢字を知らなかったという非漢字圏学習者は43名で70%だった。漢字習得の困難な点、漢字の覚え方、学習頻度、記憶保持の方法については選択肢（適用するものを全て選択できる）を用意し、学習時間数ならびに既習漢字の記憶保持率については自己申告とした。

3 漢字自習の実態調査の結果と考察

回答は各質問事項について、漢字圏学習者と非漢字圏学習者の比較を%で算出した。まず、「漢字の学習において何が難しいか」という質問について、非漢字圏学習者の83%が「書くことの記憶保持」、67%が「書き方を覚えること」としていた。一方、漢字圏学習者は「書くことの記憶保持」を56%、「読みを覚えること」を44%としていた。

「漢字をどのようにして覚えるか」という質問では、非漢字圏学習者では「繰り返し書く（書写）」が84%で一番高く、次が「語彙リストを見る」で74%だった。大北

（1998）が初級教科書を使用している3つの大学の日本語学習者452名を対象にして行った漢字学習についての調査の中でも、「書いて覚える」は最も頻繁に使われていたストラテジーだとして報告している。同じ質問について、漢字圏学習者は、「語彙リストを見る」が83%と一番高く、「繰り返し書く（書写）」は44%だった。また「フラッシュカードの作成」は非漢字圏学習者の56%に対して漢字圏学習者は0%だった。次に、学習頻度では両者に差はあまりなく、週に2、3回またはクイズの当日あるいは前日に勉強すると答えた学習者が大部分だった。学習時間数については、非漢字圏学習

者は漢字圏学習者の約 2.5 倍で週に 2 時間半をかけていた。既習漢字の復習についての質問では、非漢字圏学習者の 81%、漢字圏学習者の 78%がすると答えた。既習漢字の記憶保持率では非漢字圏学習者の 56%に対して、漢字圏学習者は 86%と申告した。この結果から学生の漢字学習の実態がわかったわけであるが、この中で教師側の注意をひいたのは非漢字圏学習者の記憶保持率が 56%であるという事実である。この数字は、非漢字圏学習者にとって特に既習漢字の記憶保持が難しいということを示唆していると考えられる。一つの課の漢字が覚えきれないまま、次々と進んで行っていることもあるだろう。豊田（1995）が非漢字圏学習者 95 名を対象として実施した「漢字学習に対する学習者の意識」の調査の中でも、困難な点として一番多かったのは「学習してもすぐ忘れる」という記憶保持についてのものだったと報告している。

4 ウェブサイトを使った漢字語彙練習プログラム

この調査の結果を見て、我々は、どうしたら漢字学習者がかかえている難しさを軽減して、どのような方法で学習者に既習漢字の復習をしやすくし、更にそれが記憶保持に繋がるようにできるのだろうかと考え始めた。その方法を模索していた時に、学生の一人が自分の漢字学習用に作ったウェブサイトを見る機会を得た。その学生は非漢字圏学習者で日本語学習歴は三年、専門はコンピューターサイエンスである。彼自身漢字が苦手で、フラッシュカードを作ってもカードが増えるだけで効果はないと考えており、その代わりに三年の秋学期のコースで習う課の漢字練習のプログラムを自分で作りながら漢字学習をしていたのである。このプログラムの特徴はまず日本語漢字学習者が必要にせまられて作ったことだと思われる。教師ではなく、学習者からのこのような方法で漢字をもっと効果的に学習できるという提案であった。我々は彼の「漢字の練習」サイトを検討し、さらにいろいろな改善を加え、大学から助成金を取ってこのサイトを日本語の履修者全員が使えるようにすることにした。2004 年春学期よりすでにテスト試用をしているが、秋学期までに完成の予定である。

「漢字の練習」は漢字語彙の読みとその意味を練習するプログラムである。当大学の 1 年から 3 年までのコースで使う教科書『げんき』と『中級日本語』にある漢字語彙がすべて入っている（『げんき』317 と『中級日本語』941、ただしこの中に重複している漢字もある）。基本的に授業での漢字導入後の練習を目的としているが、既習漢字の復習も可能である。練習のフォーマットは 4 つの選択肢から正しい答えを選択するが、その際に残りの 3 つの答えはその課までの既習漢字語彙がランダムに入るようになっている。よって、毎回今までに習った漢字語彙をくり返し見ながら正答を選ぶという作業をすることになる。この作業自体が人工的ながらも「漢字を見る」という環境を提供するわけである。このプログラムの使用により授業後の漢字の定着を促進し、学習者の漢字の覚え方において多く挙げられていた「語彙リストを見る」という機会を教科書以外でも与えることになる。また、教師側では、学習者の利用状況を把握できるという利点もある。練習のタイプごとの利用者数、平均点などの統計が出せ、問題の編集も可能である。詳しくは www.kanjirensuu.org/duke を参照されたい。

清水、加納（1992）は筑波大学留学センターでの Computer Assisted Instruction を取り入れた漢字の自習についてその効果として、「学習者が自分の準備状況と必要に応じてメニューを選べるという自主的な選択が個別学習意識を促し、学習者自身の効果的な

自習計画につながる」と報告している。我々は「漢字の練習」プログラムもこの効果をもたらすと考えている。

このプログラムの特徴としては、以下の点が挙げられる。

- 学習者主導で学習者に選択権がある。
(学習者の必要性に応じてクイズのタイプ、その課の漢字の数などが選択できる。複数課を選択して復習することも可能)
- 間違っただけをくり返し練習できる。
- ゲーム感覚で楽しんで学習できる。
- クイズの形で点が毎回%で表示されることにより学習者のやる気を促進する。
- ひらがな入力することで、確実に読みを習得できるようにする。
(特に学習者が弱い長音、濁音、促音、拗音など)
- 学習者と教師との共同開発プログラムである。

一方弱点としては、練習が単語レベルに限られていて文脈の中での読み練習ができないという点が挙げられる。また本プログラムは読みと意味の練習を目的としているため、多くの学習者が漢字を覚えるにあたって不可欠としている「書く練習」の機能は備えていない。

5 使用状況の調査の結果と考察

この漢字練習プログラムを学生が使用し始めて約一か月の段階で、実際の使用状況のアンケート調査を行った。二度目のアンケートへの参加者は58名であった(漢字圏学習者16名、非漢字圏学習者42名)。「漢字の練習」サイトの使用状況は78%で、使用者の89%が「いい」11%が「まあまあ」と答え、「よくない」は0だった。プログラムのいい点として最も多かったのが「復習にいい」で80%、次が「自分のペースでできる」で51%、続いて「楽しく学習できる」が45%で、「覚えるのにいい」は31%だった。使わない学生の理由としては、「自分のやり方がある」、「時間がない」が多く挙げられていた。

6 終わりに

一か月の試用で使用者の100%がこのプログラムに対して肯定的な評価をしており、特に「復習にいい」、「自分のペースでできる」という点で、我々が意図した既習漢字の復習をしやすくすることへの効果があったと思われる。使用者からは “This is a wonderful program, that I know I am going to find very very useful for both kanji quizzes and regular tests” というコメントもあった。また清水、加納(1992)が指摘した、漢字学習へのComputer Assisted Instructionの導入が学習者に個別化、最適化による自立的学習をより可能にするという点も達成できていると思われる。学習者があげた「書く練習ができない」という点についてはこのプログラムの限界であるが、「書くこと」の指導については、栗谷(2002)やGamage(2003)他、多数の研究がされている。書く練習の効果的な指導や練習方法については今後の課題として取り組んでいくつもりである。

参考文献

大北葉子 (1998) 「初級教科書の漢字学習ストラトジー使用及び漢字学習信念に与える影響」日本語教育論集『世界の日本語教育 第8号』国際交流基金日本語センター pp. 31-45

清水百合・加納千恵子 (1992) 「CAI を利用した漢字学習—授業における漢字学習と自学自習のメカニズム—」『日本語教育 78 号』日本語教育学会 pp. 92-105

豊田悦子 (1995) 「漢字学習に対する学習者の意識」『日本語教育 85 号』日本語教育学会 pp. 101-113

Gamage, Gayathri Haththotuwa (2003) “Issues in Strategy Classifications in Language learning: Framework for Kanji Learning Strategy Research” ASAA e-journal of asian linguistics & language teaching Issue #5 December 2003 pp 1-15 The Asian Studies Association of Australia

Kuriya, Yasumi (2002) “Theoretical Implication for Kanji Instruction in the JFL Curriculum” ATJ Seminar Presentation 2002